

# センタージャーナル

〒460-0016  
名古屋市中区橋二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳  
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



研究生教化研修「真宗儀式の教相(第10回)」講師 竹橋 太氏(本廟部仕出) (写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録 真宗儀式の教相 ②・③
- ・ 教化センター研究生報告 なぜ部落差別問題を学ぶのか? ④・⑤
- ・ 尾張の真宗史 ⑥・⑦
- ・ 研究生報告 ⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆ 挟み込み(※寺報などにご利用ください)

## 無二の勤行

先般、有縁の呼びかけにより福島を訪れた。その際、震災修復工事を終えたばかりの原町別院に参拝させていただいた。福島第一原発から北へ二十四kmの南相馬市に構える念仏の息づく道場。ここで院代を勤める木ノ下秀昭氏より伺った話が今も胸にのこる。「この

たびの大震災により、福島県浜通の町は津波に流され、そこで生活していた多くの御門徒も亡くなりました。そしてフクシマの見えない放射線の恐怖は、人の心を不安にし続けています。今まで共に生活してきた多くの同行も放射線被曝から身を護るために避難。この現状に鑑みると、報恩講を勤められない寺院もあり胸が痛みます。」

院代の伝える言葉を聞き「御俗姓」の「毎年の例時として、一七か日のあいだ、形のごとく報恩謝徳のために、無二の勤行をいたす」が憶いおこされる。

\*

この地における大谷派寺院の始まりは、今から約二百年前にさかのぼる。たび重なる飢饉による打撃からの復興を命題に、金沢・富山の北陸門徒を中心に相馬への移民はおこなわれた。その後、「ただ念仏」の信仰が門徒を突き動かす、真宗の教線を広範に展開させたという。ここに後述の竹橋師の言葉借りれば、「私たちには真実の一片もない」自身と信知したしるしとして、「善

悪で人を排除していく」ことを許さぬ仏事から展開したいのちの歴史が土徳となつてのこる。

\*

七百五十一年、毎年の例時として勤められてきた報恩講。その歴史的事実を戴き直せば、どの時代どの場においても幾多の問題を抱えるなか、「ただ念仏して」の呼びかけに「ただ信心を要とす」と応える報恩謝徳の御仏事として勤められてきた。このたび出遇った院代の胸の痛みが、単に年中行事の一つとして報恩講を勤めてきた私の懈怠慢心を打ち破ってきたのである。

\*

過去から未来に繋がるいのちを、誰一人排除しない南無阿弥陀仏。この念仏から賜る信心のお勤めを「無二の勤行」と呼びならわしてきたのではないか。阿弥陀仏に南無と頭が下がるとき、絶望の只中にあっても、自分の中にあるいのちは決して絶望することのない力となる。震災を乗り越え共に生きる力を与え、未来に繋ぐいのちを与え賜う勤行こそ「無二の勤行」であったのだ。「別院は最前線寺院として衆会の間・結の心を共に、支え合う念仏の場とならねばならない。」院代の肉声が今も、耳朶に残る。

(教化センター主幹 荒山 淳)

## 講義抄録

2012年9月7日

〈研究生「教化研修」〉  
「真宗儀式の教相」竹橋 太氏  
(本願部出仕)

第10回

儀式は感性を一つの根拠として  
作られている

今日七日は、本山で得度式を行っています。皆さんもご記憶があると思いますが、唐戸を締め切り、暗い所で蠟燭を灯して剃刀（おかみそり）を行います。日の光が射すような明るい所よりも、暗い所で執り行われるほうが厳かで良いような気がしませんか。「得度」という「新しい誕生」を、私たちが、無意識の内に、お母さんのお腹から出てくるときの、つまり実際の誕生のイメージと重ねて感じているからだと考えられます。儀式の形、基本の枠組みは人間の感覚によって作られてきたものなのです。

たとえば、私の実家は北海道なのですが、東北・北海道南部に江戸時代から続く真宗系の民俗宗教があります。いわゆる「秘事法門」です。表向きはご門徒でも、ちょっと変わった信仰を裏で展開しているわけです。たとえば、善知識と言われる人が、入信のために「おとりあげ」ということをしています。まさに出産ですね。暗い狭い部屋にしばらく閉じ込めておいて「光が見えたか」と聞いて、「光

が見えた」と答えれば信心成就だということになるわけです。このように、本山で行われる得度式も秘事法門で行われる儀式も、暗い所から再生する、というような人間の感性を基として、あるいは一つの根拠として作られてきた点では、同質のものをもってしているわけです。

答えを「形」として与えるために  
儀式が行なわれる

儀式は形です。すでに実現した信心の世界が、目に見える形で表現されているのです。私たちが合掌礼拝し、儀式を行う姿は南無阿弥陀仏を目に見える形にしたものです。阿弥陀さまに「南無」といつて頭が下がりが、全てをおまかせしているわけです。それは救い以外のなものでもありません。私たちの頭が下がるということがほとけさまがいらっしゃることを明かにしているのです。逆に言えば、私たちの頭が下がっていないければ仏さまはいない。我々が凡夫として手を合わせるから仏さまがいる。また凡夫だと知らせるはたらきを仏というわけです。それを形にして、目に見えるように表現

しているのがお念仏であり、浄土真宗の儀式なのです。しかし実際には、私の意識としては、頭が下がっていないわけです。まず、先に「形」が与えられ、それをなぞる、南無阿弥陀仏の練習をしているということなのだと思います。

いまお話しした「得度」の「度」とは、彼岸に「度(わたる)」ということであり、「僧侶になる・仏弟子になる」ということは覚りを得たことと同じだ」ということなのです。お念仏でもそうですが、仏の「教えに頭が下がるといふことは、「救い」を表しているわけです。そもそもそれが仏弟子になるといふことです。得度に実質が与えられ、南無阿弥陀仏の実質が私にあらわれれば、それは「救い」だといふことなのです。

何度もいいますが、南無阿弥陀仏と称えるから救われるわけではありません。南無阿弥陀仏という「形」は答えとして与えられている。得度も仏弟子になるといふ「形」が与えられ、本心に仏の教えに頭が下がった時に完成するわけです。

そこで問題となるのが「何に頭を下げ、手をあわせているのか」という方向性です。我々は阿弥陀さまに手を合わせるも

のとなる、お釈迦さまの教えにうなずいていくものとなっていく。そこが違うわけです。

たとえば葬儀はどんな宗教でもするわけです。皆さんの中には「浄土真宗の葬儀では、習俗的な部分をもっと排除し、純粹に真宗的な表現を追い求めるべきだ。」と考えている方もいるかもしれませんが。しかし、その考え方に、そもそも無理があるわけです。「純粹で真宗的な表現など無い」「私たちには真宗の一片もない」というのが、浄土真宗です。方便というのでしょうか。方便という言葉は、先に述べたように表現というのは全部人間が作ったものです。得度にしても葬儀にしても、具体的な表現というものは、人の中で生まれ、育まれて今のような形となり、皆が納得するものになってきているわけです。

葬儀は仏教以前からあります。ですから、形から言えば、もともと行われてきたものを土台として、その上に仏教・浄土真宗が現われると考えるべきなのです。その形をかりて、つまり皆が認めるような儀礼を行いながら、それを浄土真宗の葬儀としてゆく。形はある程度共通だけれども、その中身、意味する所を浄土真宗を表現するものにしてゆくということが必要なのです。それが「方便化身の浄土」といふことです。

「純粹な浄土真宗の葬儀」などというものを考えだすと、こうでなくてはという条件を作り出し、善悪で人を排除していくものになってしまいます。方便にならない、もつと言えは浄土真宗にならない、ということなのです。



## 研究生報告

2012年10月1日~2日

## なぜ部落差別問題を学ぶのか？

ー解放運動推進要員 大阪現地研修に参加してー

さる十月一日から二日に開催された「教区解放運動推進要員現地研修」に教化センター研究生及び教化推進要員が参加した。

このたびの現地研修では、山本義彦氏（部落解放同盟浅香支部顧問）、上杉聰氏（大阪市立人権問題研究センター特別研究員）、梯良彦氏（本願寺派順照寺副住職）の三氏から、「にんげんの街を目指して」、「歴史から見た浅香の解放運動」、「本願寺派における解放運動の取り組み」宗法改定を通して」について、それぞれ講義を受け、浅香地区でのフィールドワークが行われたほか、リバティーおおさかを見学した。

名古屋教区では、組から推薦された解放運動推進要員を中心とした取り組みが続けられているが、今、あらためて「なぜ部落差別問題を学ぶのか」について、現地研修に参加した研究生の受け止めをここに紹介する。

## 部落差別問題を学ぶ「楽しさ」

「この辺には被差別部落はないから関係ない」「今さら部落差別問題を蒸し返す必要があるのか」など。部落差別を学ぶことについて、様々な疑問の声を聞く。正直に言えば、私自身も部落差別問題を学ぶことに乗り気ではなかった。差別問題に真剣に取り組めない己の態度を叱責され、どこまでも自身が差別者であることを受け取っていく。このような重くて暗いものを背負って歩むというイメージと、部落差別を学ぶということとを、直結させて考えていたからである。

しかし、実際に被差別部落の方々の交流を通して感じたのは、これまで自分たちが受けてきた差別への怒りや苦しみを、私たちに背負わせるような重いものではなかった。また、不勉強な私を叱責することも、問い詰めることもなかった。研修の度に感じたのは、一緒に差別を無くしていこう、社会を良くしていこう、という願いであり、一人の人間と一人の人間との交流であった。

このような交流を重ねる内に、差別問題に取り組む方々の真剣な態度と情熱に感化され、私は差別問題を意識するようになったのである。今まで見ようとしてこなかったものに目を向け、耳を傾けるうち、新たな疑問は次々に湧いてくる。自分は差別に出会ってこなかったのか、差別とは何か、宗祖は差別とどう向き合ってきたのか。このような現実の問題に答えていくものが真宗の教えではないのか。真宗の教えを本気で聞き続けてきた

被差別部落の方々の姿を通して、部落差別問題を学び問うことによって、私自身の中の真宗に対する疑いが消えるのを感じたのである。このような歩みこそ、私が感じた部落差別問題を学ぶ「楽しさ」である。

部落差別問題は、個人の問題ではない。多くの仲間と共に考えていかなければならない人間の問題なのである。だからこそ、誰もが興味を持って共に学んでいけることを切に願うのである。

（教化推進要員 飯田真宏）



大和川沿いの大阪・浅香地区をフィールドワークする研究生



講師の山本氏の案内で浅香の街をフィールドワーク

見ていないけれどももある「差別」

今回は、浅香の街を訪れた。浅香の街に到着し、「新しい街だなあ」と感じた。

この新しい街には、外国人労働者のための研修センター、在宅サービスセンター、特別養護老人ホームなど、社会的に弱い立場に陥りやすい人々のための施設が立ち並んでいる。

そして、この新しい街に生まれ変わるためには、山本さんをはじめとした解放運動を担った人々の情熱があった。部落外からの差別だけでなく、部落内の「寝た子を起こすな」という大多数の人々の心を動かしていった結果が、この新しい街だった。

山本さんの社会的弱者と共に歩もうとする姿は、御同行・御同朋といわれた親鸞聖人の姿と重なった。

(第七期 研究生 安部 淳)

今回初めて浅香地区に生まれ育った方の話をゆっくり聞かせて頂く機会を得た。そのような中で、浅香地区出身の方すべてが解放運動に取り組んでいるのではないことを知った。

また、今回は浅香地区のご住職の話も

懇親会の中で聞いた。地域に密着しているがゆえに、積極的に解放運動に取り組んでいる人と、解放運動への関わりに躊躇している人との狭間での苦労話を聞かせていただいた。

元来「部落差別」と聞いてもピンときていなかった私だが、「実際に身を運んで現地の方の話を聞く」ことの大切さを感じた。

(第七期 研究生 小嶋 朋大)

このたびの現地研修で、たとえば鉄道の改札口も利用頻度に関わらず被差別部落側には造られなかった事実を実際に身を運んで知った。講義だけの研修では、自分とは無関係などこか遠くの出来事、或いは「昔の出来事」として感じていたような気がする。

これまで、「私は差別していないから私には関係ない」としてきたが、実は気づいていないだけだったのだ。部落差別問題を学ぶということは、私の日常生活における私自身の差別性に気づかされていくということでもあったのだ。

(第八期 研究生 石原 唯和)

今回の研修では、被差別部落で解放運動に携わっておられる方々の生の声を聞

かせていただいた。皆さんに共通しているのは、部落解放運動を決して諦めないという情熱だった。そして、それは真剣に「人」と触れ合い、向き合うということなのだと教えていただいた。

今回の研修で出会った方々の情熱が、深く私自身の中に響いたように感じた。今後も引き続き、多くの方々と出会っていききたいと思う。

(第八期 研究生 花園 盛二)

今回研修に参加して強く感じたのは、



上杉氏の説明に聞き入る参加者

差別する側からは、差別というものが見えにくいという事実である。実際私は研修に参加するまで、部落差別の歴史や問題性等を、わかっているつもりでした。しかしそれは、差別されない側からの傍観的な受け取りであると気づかされた。講義を聞き、浅香の街を歩くことで、部落差別問題の根の深さと広さを知った。まだまだ我々は部落差別から遠いところで議論しているだけであることを教えられた。教えられ、知らされ、気付かされる中で、一人の人間としてあらゆる差別からの解放という願いを持ち続けていく。それがつまり「部落差別問題を学ぶ」ということではないだろうか。

(第九期 研究生 田島 晶)

今回の研修を通じて、日頃、目を向けていない事柄や知られていない様々な状況や問題が、常に私の周りにも沢山あることを考えさせられた。

「見えないけれどもある」であり、「見えないけれどもある」。この言葉と大阪浅香地区の大和川河川敷の風景が繋がり、そのことが一番印象に残った。

(第九期 研究生 藤原 猶誠)

## 尾張のお講

## — 中島郡会五日講 —

はじめに

今回は、センタージャーナル七九号の「尾張のお講—中島郡会レポート」で触れた中島郡会の五日講を、再び取り上げることにする。この五日講は中島郡会結成以前からあり、郡会結成の母体となつたと考えられるのだが、実は史資料が乏しく変遷がよく分からない。ただ、今年

五日講中へ宛てられた、先代乗如上人制作の御消息があったことが分かつている(注1)。残念ながらこの御消息自体は現存していないようであるが、今ここで、『真宗史料集成 第六卷』(同朋舎出版)の「大谷派歴代消息 乗如集」に掲載されている御消息記録を参考に、復元してみると次のようになる。

入ってからの調査で、昨年の段階では不明であったのが、かすかながら分かってきたことがある。そこで、この度新たに得られた知見を交えて、もう少し詳しく論じてみようと思う。

## 一 御消息について

現在十月五日に、中島郡会一宮組で勤められる五日講の法要では、厳如上人証判で、「尾州 中寫郡 海東郡 海西郡 本山相統 五日講中」宛の御消息が拝読される。しかし、この宛先は加筆修正されたものであり、そもそもは五日講に宛てられたものではない。その一方で、文政元(一八一八)年に達如上人より、「尾州中嶋郡拾一ヶ寺卅五ヶ村 本山相統

そのもとにをいて、このたひ講をとりむすハれさふらふよし、法義相続のもとひと神妙におほえさふらふ、これしかしながら、生死をはなれて浄土に往生せんかための会合なれば、たゞ法義をかるくしくこゝろえて、いつも其座席をふさくはかりの風情にてはなにの所詮もなきものか、されは一味の同行となりてかたりあひぬることは、かりそめの縁にてハあるへからず、宿世のちなミあさからさることなれば、をのく人我の情をわすれ、あひたかひに信心の有無を沙汰して、おなしく一味の安心に住し、真実報土の往生を証得すべきものなり、それうけかたきは人身、あひかたきハ仏法なり、た

ま／＼仏法にあふことを得たれとも、末法のいまのときは機根最劣にして、自力修行の門はかなひかたきかゆへに、いそぎ他力易行の道に帰すへきものなり、すてに三恒河沙の諸仏のみもとにをいて、大菩提心をおこすといへとも、自力かなはずして久遠劫よりこのかた生死に流転して、かゝるまよひの凡夫とはなりたり、またこれよりのちも、うつしく他力の信心を決定することなくは、いつのときにか苦界をいてはつへきや、まことになげきてもなをあまりあるものか、抑、当流聖人のすゝめまします他力の信心といふハ、雑行雑修自力なんといふひかおもひをなげすて、かゝる一生造悪のあさましきわれらこときのものを、やすく往生せしめんかために、をこしたまへる弥陀の本願のありかたさよとふかく信して、一心に弥陀に帰命したてまつれば、願力無窮にましますかゆへに、罪業深重のものもえらハれず、仏智無辺なるかゆへに、散乱放逸のものもすてたまハさるいはれあるによりて、六趣四生の因果はたちまちに消滅して、あまさへ正定聚不退のくらゐに住し、万善万行恒河沙の功德をあたましますなり、このころを、経には、令諸衆生功德成就とよきたまへり、これを他力とはまうすことにてさふらふ、さて、この信するころも、念するころ

も、仏智他力よりをこさしむるところなりとしるへし、されはかゝる不思議の本願にあひたてまつるによりて、やすく往生をとくへき身となりたることをつねによるこひたてまつりて、仏恩報謝の称名仏せしむべきなり、これすなはち、憶念弥陀仏本願、自然即時入必定、唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩といへる釈文のころにもかなふへきものなり、あなかしこゝ

〔右如乗如上人文可有信心決定事肝要也〕

十一月十二日

文政元年 〔達如判〕

尾州中嶋郡拾一ヶ寺卅五ヶ村

本山相統 五日講中

※〔一〕部は推定

これ以外にも尾張に存在する五日講に下付された御消息はあるようであるが、中島郡全域にわたるような広域の五日講に下付されたものは、今のところ他に見出されない(注2)。ここにある「中嶋郡拾一ヶ寺卅五ヶ村」が具体的にどの範囲なのかは特定できないが、規模を考えると、現在の中島郡会がこの中島郡五日講の流れであることは間違いないであろう。

## 二 法要・寄合について

さて、中島郡会には全体で取り組む「郡会」と各組ごとの「小会」があり、五日講は現在一宮組の小会法要として行われている。しかし、かつては全体でも五日講を行っていたと考えられることは、前回にも述べたとおりである。それに関して、今回改めて稲沢市祖父江町の来遊寺住職・長崎誠氏に話を伺ったところ、次のような御教示をいただいた。

- ・五日講はもともと中島郡会全体の寄合、法要であった。
- ・毎年十月五日（のちに十一月五日）に大寄合があり、各組持ち回りで会所をとめた。
- ・大寄合は本山報恩講お持ち受けの意味合いがあり、お取り持ちのことが話し合われた。

さらに、来遊寺門徒で中島郡会山崎組の渡辺廣行氏が所持する、昭和三十七年九月に作成された、「第二十八組祖父江上組同行」による中島郡会記録帳には、

東本願寺分離本山主

十二代目

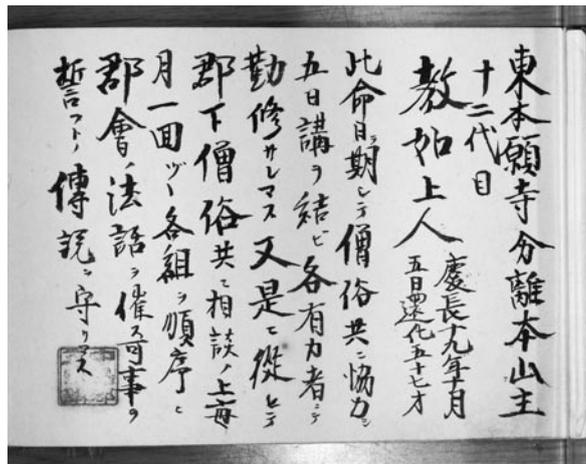
教如上人

慶長十九年十月  
五日還化五十七才

此命日ヲ期シテ僧俗共ニ協力シ五日講ヲ結び各有力者ニテ勤修サレ

マス又是ニ從ヒテ郡下僧俗共ニ相談ノ上毎月一回ヅ、各組ヲ順序ニ郡會ノ法話ヲ催ス可事ヲ誓フトノ傳説ヲ守リマス

※写真参照



として、昭和十四年からの、山崎組北地域が担当した際の会所名が記されている(注3)。これを見ると、そもそもは中島郡会として五日講の寄合が毎月もたれ(日にちは不定)、その上で本山報恩講前に大寄合が行われていたことがわかる。また、会所名はすべて寺院であるので、各組の地元寺院を順番に回っていた様子が見てとられるが、平成十四年十月二九日の妙用寺を最後に記録が終わっており、おそらくはこのあたりで毎月の寄合はなくなり、年一回の大寄合も形を変え、一宮組の法要としてのみ行われるようになったのではないかと推定される。

## むすびにかえて

中島郡会の各組の小会法要では、現如上人下付の教如上人御影が奉掛される。五日講の名称は教如上人の命日にちなんだものであり、中島郡五日講に教如上人に関する何らかの由緒があったことが推測されるが、それについては何も伝承がない。ただ、明年上人の四百回忌を迎えるにあたり、尾張地域にも教如上人ゆかりの講が存在することを知っておく必要はあろう。そして、以前は中島郡会において毎月この寄合がもたれ、それが本山護持活動の基盤になっていたことも踏まえなければならぬ。

ただ、今のような形になる前の一宮組

## 研究生報告

# 永代経総経奉仕団に参加して

真宗本廟(東本願寺)で春と秋の彼岸中に厳修される「永代経総経」に併せ、今年から「永代経総経奉仕団」が始まった。二泊三日と二泊二日のコースが選択でき、忙しい人でも個人で奉仕団に参加できるというものだったので参加させて頂いた。申し込まれた方々は、ほとんどが奉仕団に参加するのが初めての方ばかりだった。はじめのうちは緊張して、ぎこちない座談会ではあったが、補導さんの導きと、真宗本廟という場のはたらきによって段々と打ち解けてきた。そして、「親

の小会に関する疑問が残る。当然他の組と同じように一宮組でも法要が行われていたであろうが、その具体的な姿についての記録等はまだ目にしていない。皆様からの御教示をお願いする次第である。

(研究員 小島 智)

注1 七九号では、この御消息について、文政元年に乘如上人より下付されたとしてしまつたが、乗如上人は寛政四(一七九二)年に亡くなっているため、この場を借りて訂正しておく。

注2 『真宗史料集成 第六卷』「大谷派歴代消息」、「名古屋別院院史 史料編」(真宗大谷派名古屋別院発行)「尾張国下付御消息一覧表」参照。

注3 それ以前については「古帳二有記ス」とあり、他にも記録があったようであるが、それは確認できていない。

## 現代社会と真宗教化 報告

## 自死者追悼法要

## 「いのちの日 いのちの時間」

(2012年12月7日 於対面所)

いのちに向き合う宗教者の会 主催 名古屋教区教化センター 後援

教化センターでは、現代社会が抱える諸問題と真宗教化の接点を探っている。中でも、自死でご家族等を亡くされた方々に対し、どのような支援が望まれているかについて、宗教・宗派を超えて自死問題に取り組んでいる「いのちに向き合う宗教者の会」を後援し、その関わりの中で情報収集、模索を続けている。

大切な人(家族、恋人、友人等)が自死で亡くなり、哀しい思いをされている方や、自身を責め、苦しみを内に秘めている方、世間の心無い言葉や態度に辛く悔しい思いをされている方が、安心して亡き人を偲ぶことのできる場を開きたいという願いのもと、「いのちに向き合う宗教者の会」主催による自死者追悼法要「いのちの日 いのちの時間」が名古屋別院対面所にて勤められた。

40名程の参加者から事前に記入頂いた、亡き人へのメッセージを御尊前に奉納し、各宗派の特色を合わせた法要が営まれた。また、法要後は僧侶スタッフを含む数名のグループに分かれての茶話会を開き、法要を終えて感じたことなどを語り合った。

感謝の言葉が綴られたアンケートの回答からは、仏さまの前に座って儀式の進行に身を委ね、心のままに思い、語り合うことのできる場

が、自死遺族にとってどれほど大切な場であるかを知らされる。それは同時に、参列者の日常生活では亡き人を偲び、涙を流すことすら許されない過酷な状況が推察される。

毎年12月に勤められているこの法要は、今年で4回目を迎えた。様々な事情から年忌法要を営むことのできない方もいる。また、恋人を亡くした場合には、年忌法要やお墓にもお参りできない。そういった方々にとっても、年に一度のこの法要は、時の流れだけでは癒されない深い悲しみ、感情、いのちに向き合うことのできる“場”となっているのだろう。そして、僧侶と自死遺族が、ともに救われていく道を探し続ける“場”でもあるのだろう。

(教化センター研究員 前田 健雄)



法要後に行われる茶話会のリハーサルを行う各宗派の僧侶

## INFORMATION

## 教化センター日報

■2012年9月～11月

9月7日	教化研究 「真宗儀式の教相(第10回)」(竹橋太氏) 研究業務・「平和展」学習会	20日	HPリニューアル会議	26日	法関寺門徒服部家 研究生学習会
10日	HPリニューアル会議	26日	研究生・教化研究 「第1回 伝道スタッフ養成講座」参加	26日	研究生学習会 「現代社会と真宗教化」 (パネルディスカッションをしてみよう)
11日	HP「お東ネット」会議	28日	研究業務・「平和展」学習会	28日	研究業務・「平和展」学習会
14日	研究生・実習 「真宗門徒講座(釈尊伝⑤)」	10月1日～2日	解放運動現地研修	28日	研究業務・お講調査 聯芳寺
21日	研究生学習会「現代社会と真宗教化」 (パネルディスカッションをしてみよう)	9日	研究業務・ 「自死遺族のわかちあいの会」後援	11月5日	解放運動研修
		12日	研究業務・「平和展」学習会	6日	HPリニューアル会議
		15日	研究生学習会「教団問題と私」	9日	研修生学習会
		17日	HP「お東ネット」会議		「私にとっての教団問題」 研究業務・「平和展」学習会
		19日	HPリニューアル会議	15日	研究生・実習
		22日	研究生・実習	21日	「真宗門徒講座(釈尊伝⑦)」
			「真宗門徒講座(釈尊伝⑥)」		HP「お東ネット」会議
			研究業務・お講調査		

## お知らせ

○2012年12月29日(土)から2013年1月5日(土)(冬期休暇)、2月7日(木)～8日(金)(職員研修)のため、教化センターを閉館させていただきます。

○2013年2月1日(金)から15日(金)までの期間、教化センターの蔵書・資料の整理を行います。この期間は、書籍・視聴覚資料などの貸し出しを停止させていただきます。借り受け中の方は、1月31日(木)までにご返却ください。

ご迷惑をおかけいたしますが、  
何卒ご理解、ご協力いただきますようお願い申し上げます

## 《編集子雑感》

葛飾柴又に帰ってきた寅さんが、団子屋裏の印刷工場に顔を出し「ヨッ、労働者諸君!景気はどうだい?」と声をかける。「相変わらずひでえもんよ」と応じるのはタク社長。48作の映画の中で景気はいつも悪かったような気がする。この後、お決まりの喧嘩が始まるのだが、何とも言えない哀愁と心の豊かさが窺える。年末の政権交代に込められた「景気回復」の向こう側に見え隠れする改憲・国防軍はどうだろうか。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し」という憲法前文の誓いと寅さんに漂う心の豊かさを大切にしたい。

(K)

## 公開講座のご案内 (聴講に費用はかかりません。お気軽にご参加ください。)

## ◆研究生教化研修

## 「真宗儀式の教相(第11回)」 ※僧籍者対象

講師 竹橋 太氏 (本廟部出仕) 期日 2013年4月12日(金)  
時間 午後4時30分～6時 会場 名古屋教務所1階 議事堂

## ■教化センター

## 〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

## 〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

